

＜ もくじ ＞	
1. 巻頭言：「止まった時間」の試練	1
2. 2020年度一般社団法人シニア社会学会大会のご案内	2
3. コロナ禍について思うこと、言いたいこと	2
4. 原稿募集！ コロナ禍について思うこと、言いたいこと	4
5. 研究会からのお知らせ	5
6. 研究会からの概要報告	6
7. 事務局からのお願い	6

1. 巻頭言：「止まった時間」の試練

2020年のコロナウイルスの世界中への感染拡大は、人やモノの移動と経済活動、社会活動を長期にわたって停滞させています。グローバル化した世界の「止まった時間」は、過去のいくつかの感染症の世界的拡大の記憶を呼び起こし、大きな時代の転換を予感させる時間として受け止められています。この「止まった時間」の真ただ中で、当学会も予定された活動の停滞に悩まされ右往左往してきました。奇しくもシニア社会学会は、今年「創立20周年」を迎えています。この節目の年に、「止まった時間」のメリット活かせるかどうかは、われわれ次第です。「止まった時間」が引き起こす不安とその源泉の意味をどこまで掘り下げ、これまでの20年の歩みなかの確かな部分を再認識しつつ、目先の問題にとらわれずに新たな方向性を見定めることができるかが、われわれの当面の課題ではないでしょうか。昨年からはじめた当学会の3か年計画「新たな時代への挑戦～エイジフリー社会の課題と展望」にも、「止まった時間」による試練は重くのしかかります。



今年は「戦後75年」といわれ、この間の平和は、われわれにとっては憲法に保証された当たり前感覚によって支えられてきました。しかし、ヨーロッパやアメリカ合衆国、中東諸国、一部のアジア、アフリカ、中南米地域を含めた諸外国は、この75年の間つねに何らかの戦争の危機にさらされ、実際に大小を含めた何らかの戦乱を経験してきたのであり、「戦後」という言葉はあまり意味を持たなかったことに気づかされます。日本でも安倍政権下で、貧困と格差、分断、対立、排除の深刻化が進み、対外的関係においても集団的自衛権、敵基地攻撃能力論などにより、戦後75年の平和を誇る基盤は浸食されつつあります。「止まった時間」に象徴される分岐点において、「戦後」という言葉にとって代わりうるような時代への変化がどこに向かって展開するのか、その危うさに心乱される昨今です。この不安定な危機の時代には、指針を見失った不安の蔓延とともにそれを解消するための曖昧な事実に基づく情報拡散が活発化することも災いし、極端な方向に雪崩を打って展開しがちです。

当学会の課題に引き付けていけば、ここ数年続けてきた、少子高齢化、経済成長の終焉など世界のマクロな動きにつねに目配りを忘れず、貧困、格差、差別、分断を乗り越え、異質な人同士の支え合う持続可能な地域社会の構築を目指すことについて、「止まった時間」の中で自らの立ち位置を振り返り、異論を唱える動きにも耳を傾けつつ、実質的に共有しうる指針を整備していくことができるか否かが問われていると思います。困難が伴う中で、今後その足固めの上に、どのような社会を築いていくことができるのか、会員の皆様による活発で粘り強い議論を期待したいと思います。

2020年9月16日 シニア社会学会事務局長 長田攻一

2. 2020年度一般社団法人シニア社会学会大会のご案内

2020年度の「創立20周年記念大会」は、6月14日（日）から延期されておりましたが、いろいろな技術を組み合わせることで開催の目途が立ちましたのでお知らせいたします。今年は、創立20周年記念であるとともに、3か年計画「新たな時代への挑戦～エイジフリー社会の課題と展望Ⅱ」の2年目にあたり、しかも「コロナ禍」の影響などいろいろな意味が重なる年でもあります。会員の皆様からも活発なご意見をいただけるよう期待しております。

(1) 日時：

- I. 2020年10月15日（木）14：00～16：00 登壇者によるWEB会議方式のオンラインシンポジウム（一般非公開）
- II. 2020年10月30日（金）～11月14日（土）オンデマンド配信と一般会員の意見募集

(2) 方法：労働協同組合会議室を拠点としたWEB会議と一般会員の意見募集の組合せ

(3) 内容：創立20周年記念くシニア社会学会のこれまでとこれから>

- 1) 基調講演：袖井孝子会長『シニア社会学会のこれまでとこれから』
- 2) 鼎談：『シニア社会学会のこれまでとこれから』
濱口晴彦副会長、神野毅副会長、袖井孝子会長
- 3) シンポジウム：『シニア社会学会のこれから』7名の会員にコメントをお願いします。

※ 詳細については添付のプログラムをご参照ください。（長田 記）

3. コロナ禍について想うこと、言いたいこと

(1) 福祉専門職の支援から考えるニューノーマル 畑 亮輔（北星学園大学准教授、会員）

日本でも新型コロナウイルス感染症が蔓延し、早くも半年が経過しようとしています。この間、感染症拡大予防に向けたニューノーマルが提唱され、様々な場面でこれまでとは異なる振る舞いや他者とのかかわり方が求められるようになってきました。このような中、福祉の現場において人々の支援に携わってきたソーシャルワーカーから戸惑いの声を聞くことがあります。それは、今まで自分たちが専門職として強みにしていた面接技法を生かし、クライアントとの信頼関係を構築してアセスメントを深めていくことができないというものです。このような状況下において、一方では新型コロナウイルス感染症が早く収束し、これまで福祉の専門職が強みにしてきた支援方法を再開できるようになることを祈っていますが、他方では改めて福祉援助の価値とは何かを確認した上で、このような状況下でもその価値に基づいて実践できる新たな支援方法を考えるチャンスではないかと感じています。

どの分野の専門職でも、普段は自らの専門性として強みにしてきた支援方法を疑い、見直すことは難しいのではないのでしょうか。それは専門職としての伝統を守る姿勢ではありつつも、革新を生み出すことの妨げになるものともいえます。感染症を予防するための生活様式を理由に専門的支援を停滞させるのではなく、感染症予防に配慮しつつも専門職としての価値に基づいた革新的な支援方法を開発していくことが専門職としての使命であり、またその新たな支援方法こそがニューノーマルといえるのではないのでしょうか。感染症予防という守りの姿勢から見いだされるものだけでなく、感染症に配慮しつつもこれまで以上の効果的な支援を提供するという積極的な姿勢で作り上げていくニューノーマルに注目していきたいと考えています。

(2) コロナとマスク 福元公子（会員）

突然に新型コロナウイルス感染症が日本、全世界に広がった。目では確認できない、見えない現実
に訳が分からないままに「感染予防」対策が始まった。

「ステイホーム」という全国民への指令で孫たちは休校、大人は在宅勤務（テレワーク）となり、どの家庭も「密」状態となった。わが家へは中学生の孫が避難してきて、朝から夕刻まで1室に籠りリモート学習の毎日となった。バアバは食べ盛りの食材調達と調理（コロナまでは年相応これ以上は手抜き出来ないレベルの調理であった）に追われる毎日となった。

しかし、孫たちのことはさておき私にはやらなくてはならないことがある。私は成年後見人として

それぞれの地域で生活をされている被後見人を数名担当している。通常のサービスの受給は、関係する専門職の方々（訪問医師、看護師、薬剤師、介護職員等々）からスケジュール通りに実施されることを確認した。私の訪問も通常通り毎週定刻にその週の生活費を届けて体調や生活状態を確認する。コロナ対策として私のやることは、ご本人に外出にはマスクの装着が必要と説明し納得していただくこと。そして、そのマスクの調達の役割は私となり、毎日早朝からマスクを買うためにお店に並ぶことが始まった（3月の朝は寒くホカロンをポケットに入れ販売開始までの1時間～2時間並ぶ）。しかし、買えない日が多かった。障害の方には手作りマスクを洗って使うことは困難で市販の使い捨てが必要であった。

濱口研究会のIさんにそんな話を何気なくしたら早速送ってくださった。外国滞在のご親族から日本の感染状況が大変なことになっていると送っていただいた物とのこと。思いがけないことで本当に助かった。コロナとマスクは私の忘れられない思い出となるでしょう。

(3) コロナ禍について思うこと 碓 正義（会員）

人生の終盤を迎えて感染症/パンデミックの脅威におびえる日が来るとは夢にも思いませんでした。感染を避ける必要もありますが、様々な集会や催しが開かれなくなったので、都知事に言われなくてもステイホームに徹するほかはありません。しかし、ステイするホームがあるだけまだましです。また、有難いことにホームにステイしていても特に収入がなくなるわけではないので、せいぜい退屈しのぐことができれば何とかあります。

それに引き換え、ホームがない人や外で働かないと収入がなくなる人、そしてその人たちが働かないと社会が回っていかない仕事についている人々（いわゆるエッセンシャルワーカー）は感染のリスクに脅かされながら生きていくしかありません。外出自粛や営業自粛を要請すれば、そして人々が要請に応ずれば感染が抑えられると思っている専門家の方々や政府の責任者は、自粛したくてもできない人々のことをどう考えているのでしょうか。記者会見で『ステイホーム』と叫んだり、『接触を8割減らすように』と指示したりすることがあても感染防止対策ででもあるかのように報道されましたが、そういうのは戦時中の『進め一億、火の玉だ』と同じで、政策ではなくてただの掛け声にしか過ぎません。

太平洋戦争の時、開戦に踏み切った政権は、戦況が不利になっても実態を隠して現実に向き合うことをせず、結果として戦争を止めることができませんでした。初動が遅れ不適切な感染症対策を乱発したのみならず、記録軽視を常態化させてきた前政権のいわば策士だった人物が予想通り次の政権を担うようなことになれば、政策の適否についての検証ができません。次の衆院選挙では政権を交代させ、徹底検証することが必要だと思います。また営業自粛を実効あらしめるには補償が不可欠です。財政均衡論を脱却し財政赤字を通貨供給ととらえる政権の誕生が待たれるところです。

(4) コロナ禍に思う 植原政仁（会員）

生きる命を大切に思うこと。今、有り難くも実感しています。と言うのも去年、手術。年初より放射線治療、ホルモン療法等、免疫力を著しく低下させるガン治療に専念する家族がいるからです。ガン治療に通う病院はダイヤモンドプリンセス号のコロナ患者を受け入れる感染症指定病院でもありました。

ここには生きる命がある。

妹の治療期間中、今もですが見えないウイルスに対する人への接触行動を避けざるを得ないというのは、なんとも悲しいものです。

あらゆる対人や公共の共有物にいたるまで気を使わなくてはならない悲しい距離が今も存在します。

経済面も働き方改革により残業代金は減り、コロナウイルスにより業務事態の減少が続いています。残業込みの賃金形態社会には、頭の上から鉛を押し付けられるような重苦しさが続きます。

休日の早朝に10キロ程度の運動に出ると対面から来る人が数十メートル先から道路(6M程)の反対側へ予め移動なされることが多々あります。道路を挟んですれ違う時に互いに軽い会釈を交わしそ

の場限りですが、距離をとる事でも互いに感謝できる事に気付かされます。

自他を想う深さが『距離』に現れているのではないかと感じています。

ワクチンなりが早く世界中に届きますようにお祈り申し上げます。

(5) ステイホームを考えます。 鈴木眞澄 (YNS 任意後見サポート会代表、会員)

その日は、バケツをひっくり返したような豪雨に見舞われた。人通りの少ない階段途中に腰かけているその方は、警備員二人に汚いものでも触るように両襟を掴まれて雨の中を追い出された。

何もこんな雨の日に・・・と思いながら

その方はこのことを予測していたかのように堂々としていた。両端の警備員が哀れな子羊だった。警備員は職務を全うしただけだ。

大雨に路面を叩きつける音が、進行するウイルスに煽られて、積年の不満が爆発した音にも聞こえる。繁栄する都市の地底に追いやられ、見えなくされていた者たちの反乱にも。

多くの人は雨が凌げる家があるから、家があるから、帰る場所があるから。

さて、アルベールカミュの『ペスト』は、このように著している。「終わりのない行列に並んでいる感覚」と例えた。

いつまでどこまで続かわからない行列で人々は「果てしなく息苦しい足踏み」を続けていた。

カミュの言っている「ペスト」は、当時のナチスのことだ。その当時と今とは比較にならない。

では、この作品から何が学べるか。自分は何も悪くないのに、突然日常生活を制限され、苦痛を強いられる。誰も責めることはできない。この不条理こそが問題で、そのやり場のない苦しさをいかにして乗り越えればよいのか。

テレワークや Zoom Skype など生活が大きく変わった。「ステイホーム」を前向きに考える人もいるが、目の前に見えない空気が淀み解放感が遠ざかっていく。

やがて、人々は、目の前の人物にペストを移されるかもしれないという恐怖から、互いが互いを遠ざける。ペスト後の町は、ペスト期間中はさまざまな分断の中にも「この苦難を乗り越えよう」という気持ちから大きな連帯があった。それがすっかり消滅して、立ち現れたのは別な心理的な溝だった。まさに社会が機能していないときのステイホームは、何もカミュの言う流刑と化してしまうのです。

(6) コロナ禍と時間 大下勝巳 (会員)

新型コロナウイルス禍は、傘寿を目前にした私の凡庸なライフスタイルに喝を入れてくれた。人生の「時間」について深く考えることを強いたのである。不要不急の外出自粛・三密回避によって、自分固有の時間が一挙に増えたことによる。年度末の3月に予定されていた会議や勉強会、ボランティア活動など十数件がことごとく中止になった。

外で使っていた時間が行き所を失い、どっと逆流して我が身に振りかかってきた。まるで時間の洪水に見舞われ、溺れそうになった感じがしないでもない。時間を持て余し、居場所定まらず、うろろうしている自分に気付き、こんなはずではなかった、と。

「時間」と正面から向き合ってこなかった自分の生き様を恥じた。そこで、ふと頭をかすめたのはミヒャエル・エンデ作「モモ」の一説。「時間とは命なのです。命はあなたの心の中にすんでいます」

自分の時間を心して生きてこなかった。その場その場の世事に流され、成り行き任せの日常を過ごして来た。これでいい訳がないと思うに至った。傘寿に手が届く後期高齢者の余命は高が知っている。迫りくる死への過程を歩んでいるのだ。あれこれ気散じて生きている時ではない。通俗的な日常にどっぷり漬かるな・・・といった思いが駆け巡る。が、居酒屋談義も捨て難い。新たな課題が出現した。

4. 原稿募集！ コロナ禍について想うこと、言いたいこと

新型コロナウイルス禍は、一向に収束の気配はなく感染拡大は続いています。新しい日常・生活様式が提唱されていますが、その内実は不確かです。この数か月間、皆様は、どのような日々をお過ごしでしょうか。自粛生活における体験や感じたこと、考えたことなどについて、何でもご自由にお書

きください。次号以降のJAASニュースに掲載いたします。文字数は、600字前後、締め切りは特に設けません。

送付先は、メールの場合には、jaas@circus.ocn.ne.jp

郵送の場合には、〒150-0002 渋谷区渋谷3-27-4 ナカヤビル202 シニア社会学会事務局
(事務局出勤日を水曜のみに制限していますので、できるだけメールでお願いいたします)

5. 研究会からのお知らせ

(1) 第12回「社会情報」研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2020年9月17日(木) 15:30~17:30

2) 場 所：Zoom開催

3) 概 要：コロナと共生する社会—社会情報とのかかわり等で思うこと つづき

※ 参加ご希望の場合は、9月14日までに森 moriyasu@ied.co.jp までご連絡ください。

(2) 第125回 社会保障研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2020年9月23日(水) 18:00~20:00

2) 報告者：坂本純一 (JS アクチュアリー事務所代表・(公財)年金シニアプラン総合研究機構
特別招聘研究員・元厚生労働省年金数理課長)

3) テーマ：「令和2年度年金改正と残された課題」

4) Zoomで開催いたしますので、ご参加を希望される方は、阿部と小島にご連絡ください。後程、招待メールを差し上げます。

[阿部富士子 fujiko-s@jeans.ocn.ne.jp](mailto:fujiko-s@jeans.ocn.ne.jp) [小島みさお kojima.misao01@gmail.com](mailto:kojima.misao01@gmail.com)

※ご質問がありましたら、阿部(旧姓佐藤)まで 090-4436-6853

(3) 第74回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2020年9月24日(木) 15:00~18:00

2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第7共同研究室

3) テーマ：発表と討議—『コロナウイルス感染拡大防止策として人の移動の自由を制限すること』について

4) 発表者：薄井 滋

5) 参加者：300円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) までお願い致します。

(4) 第62回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2020年10月9日(金) 17:00~19:00

2) 方 法：Zoomによる会議方式

3) 報告者：大沢真理 (東京大学名誉教授)

4) テーマ：「防災/減災と男女共同参画—『2017年度女性・地域住民からみた防災・災害リスク削減策に関する調査』を踏まえて—」

5) 参加費：無料

※ 今回は事前にメールでお申し込みいただき、そのメールアドレスで会議参加者として登録する方式を取りたいと思います。ただし、参加者の上限に達した場合は打ち切らせていただく可能性があること、ご理解とご了承をお願いいたします。

※ お問い合わせとお申込みは、長田 (pfb00052@nifty.com) まで9月30日まで。

(5) 第75回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2020年10月22日(木) 15:00~18:00

2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第7共同研究室

3) テーマ：発表 — 青鞞の女性たち/平塚らいてうと伊藤野枝を中心に—

4) 発表者：堀江副武

5) 参加者：300円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) までお願い致します。

6. 研究会からの概要報告

(1) 第11回「社会情報」研究会の報告

1) 日 時：2020年8月26日(水) 15:30~17:30

2) 場 所：Zoom開催

3) テーマ：コロナと共生する社会—社会情報とのかかわり等で思うこと つづき

今回は、スマホからの参加者の回線状況が芳しくなく、6名での開催となりました。今回の発表はその中の2名です。

(1) 齋田 「パンデミック発生」

PANDEMIC ⇔ 社会構造変化 という視点で今回のコロナと社会の関係について課題を整理した。疫病の歴史、ウイルス学が教える「ウイルスと共存する世界」、地球環境・生活変化と各種問題、「意識と行動の多様性」を承認すること、新型コロナ様式の生活予言など多面的なテーマが出された。

不要不急を生きるのが人間であり、「それぞれ個人がどう生きたいか」に基づいた生活様式を追求するのが人間である。人間は地球の支配者ではない。ウイルスや他者との共存を身の程を知りつつ進めること、「謙虚に生きること」を再発見すべきであろう、といった提示があった。

(2) 安田

新型コロナウイルスとの共生では、宿主と共存するところまで耐えることで共生となるのではないか。それは防疫と経済の二律背反の克服ともいえる。二律背反の活路をICT利用で見いだせるのでないだろうか。一方、西欧と中国で法的なものが異なる、日本では専門家委員会で情報の発信が統一されていない、ユーザーのICTスキルの未熟(80歳以上はうまく使えない)などICT社会の問題点も露呈している。テレワークの落とし穴やオンライン授業の難題も出てきている。今回はコロナの問題点を指摘した段階なので解決はこれからの課題となる。

【参加者からのコメント】

- ・アメリカではコロナ後が問題だと言われる。名門校では感染対策をしてFace to Face授業が可能だが、公立校は経済効率からネット教育になるだろう。格差がさらに広がるのが危惧される。
- ・オンライン授業では、学生はメリハリをつけるのが難しいのではないか。
- ・Web会議は、家の中が映り込みプライバシーの問題もあるため、社内の仕事の際は、画像なしで音声だけでやりとりしている。(森 記)

7. 事務局からのお願い

会員情報(氏名・住所・メールアドレス等)に変更が生じた場合は、速やかにご連絡くださいますようお願い致します。なお、電話による会員情報変更や退会の連絡はご遠慮いただいております。シニア社会学会事務局あてに、メール・FAX・郵送いずれかの方法にてお知らせください。

一般社団法人シニア社会学会・事務局(水、および月または金オープン)
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-27-4 ナカヤビル202
電話&FAX:(03) 5778-4728
eメール: jaas@circus.ocn.ne.jp URL: http://www.jaas.jp/